





日立風流物

「上野三碑」がユネスコ「世界の記憶」に登録されてから二年が経過しました。この間、「上野三碑」の意義と価値について我々自身が学び、そしてそれらのことと市内、県内はもちろん、広く日本全国へ広めようという取り組みが、多くの団体や人々の手によって行われてきました。

はじめに

～関東ブロック・ユネスコ活動研究会

in茨城に参加して♪

みについて発表してきました。

イベントで「日立風流物」が披露され、引き続き開会式が行いました。その後全体会場にて水戸市が誇る文化遺産の「弘道館」の意義と価値は「世界遺産」に値する、という主旨の基調講演がありました。そして、大会終了後に四つの分科会に分かれてそれぞれの会場で発表討議が行われました。

高崎ユネスコ協会は、第二回科会「世界遺産・未来遺産」において、上野三碑への本会の取り組みについて発表しました。以下、当日の主だった内容について報告します。

代は、日本が國家らしい国家に初めてなった時代のことです。兵農分離や参勤交代などの諸制度が整備され、法令と文書で処理される世界が確立されました。つまり江戸時代は、停滞の時代ではなく、前へ前へと突き進む近代化の始まりの時代なのです。弘道館、咸宜園、閑谷学校など、武士、町人、農民などの諸階層が学ぶための学校、私塾が全国各地に整備され、当時の国民の識字率は世界トップクラスでした。

当時の学習法の主流であつた

漢文の素読は、現在再評価されつつあります。また、思う、想う、念う、憶うなど、漢字の違いが表す感情表現の多様性は、日本人の内面の豊かさを醸成してきました。

弘道館は、質量とともに日本国内最大規模を誇り、学問や思想界に与える影響力が大きく、我が国が近代化に大きく貢献しました。氏が弘道館をユネスコ世界遺産に推举する大きな理由がそこにあります。

# 基調講演 「江戸時代の教育と現代 —弘道館を世界遺産に」

弘道館は、質量ともに日本国内最大規模を誇り、学問や思想世界に与える影響力が大きく、我が国への近代化に大きく貢献しました。氏が弘道館をユネスコ世界遺産に推薦する大きな理由がそこにあります。



鈴木暎一氏

## 第一 分科会 「世界遺産への 民間ユース」

会場の多くの人々はうなずきながら鈴木氏の講演に聞き入つていました。

**第二分科会は、高崎ユネスコ協会の上田副会長が上野三碑への本会の取り組みについて発表しました。**

「昨年十月に高崎市にある『上野三碑』が『世界の記憶』に登録され、高崎ユネスコ協会会員にとって上野三碑は時間的・空間的にさらに身近なものになりました。このことから分科会のテーマを表題のように設定しました。」との話から上田副会長の発表がスタートしました。当日配布したレジュメは次頁の通りです。

発表は、パワーポイントの画面に沿って行われ、上野三碑のそれぞれの碑の形狀やその土地の風景、さらに高崎ユネスコ協会の活動の様子などがスクリーンに映し出される中で行われました。会場の人々は説明に熱心に耳を傾け、写真に食い入るよう見入っていました。

印象に残った場面があります。上田副会長が、「上野三碑について知っている方はこの中にど



第二分科会

このことは、過日高崎商科大学で行われた、「上野三碑『世界の記憶』登録一周年記念講演」で聞いた内容と符合します。同大の学生たちが今年の高崎夏祭りの際に行つた簡易調査の結果では、「上野三碑を知らない」と答えた群馬県人は36%だったのに対して県外の人は65%だったとのことです。県内の人々の数値は、昨年度に行つた同調査の65%よりは改善されているので、県内の人々の認知度は上昇しています。しかし、県外の人々の認知度はこの一年であまり変化はないようです。県外の方々への情報発信の方法と内容がこれから運転の大きな課題だと思いました。





JICAで説明を受ける

平成三十年八月二十二日水曜日。例年になく暑いこの夏。まだ七時前だというのに額に汗がにじむほど太陽が眩しい朝。高崎市青年センターには市内のあちらこちらから三十六人の児童生徒が集まってきた。

七月に実施した事前研修会のあと、一ヶ月以上も経つのに三十六名全員が集合时刻をしつかり守つて集合。鳥居さんが全員を代表して出発の挨拶をし、バスは五分早くJICA地球ひろばに向かって出発。三芳SAで休憩。順調な走行。しかし、都内に入ると首都高速が混んでいて進まない。混むことを予想して計画を立てていたが、都内

## 第40回国際理解バスを実施して、

国際理解バス部長 中島千恵美

の混み様はどうすることも出来ない。途中、JICAに電話で遅れる旨連絡。

JICA地球ひろばには十五分遅れの到着だったが、担当の佐藤さんが玄関で待つていてくださったので、直ぐにひろばの用意した

黒崎さんは申し訳ないことでし

た。地球ひろばの今年のテーマは「食品」であり、世界の主食や飢餓と肥満、自然災害と紛争、食品ロスの問題も取り上げている。

「栄養」って何ですか? 佐藤さんの投げかけに瞬時に答えた。会場。佐藤さんから、命の維持にされたことは九人に一人が食べられない世界があり、食べ物は充分に足りているが、反面こうした国々もあるという現実。充分な食

料が生産されているのに全ての人が食べられないのは何故? 国際社会は持続可能な開発目標(SDGs)の中で、二〇三〇年までに世界中の誰もが食べられるようになることを約束している。

そのためには、「今、私たちが出ることを一人一人が考えること」とが何より大切だとつくづく考

えさせられた研修だった。

当日の担当者はバングラデシュの協力隊員だった佐藤さん。環境問題のスペシャリストとして派遣され、バングラデシュのゴミ問題解決に当たっていたとのこと。な

んど、一九六〇年頃の日本のゴミ問題とバングラデシュが今直面しているゴミ問題が似ている様子も映し出された画面を観て、急速な発展と衛生面への行き届いた学校教育、家庭のしつけが今日の日本の環境をつくったと確認できた。

昼食は世界の料理のバイキング。

昨年の反省から事前に辛さについてカフェの方と話しをしていたせいか、今年は幾分和らいでいたと引率者の弁。クスクスのサラダやタイ風カレー、チキンカレー、ランブータン入りフルーツポンチ、チキンの唐揚げ等々、飲み物もたくさんいただいた。残念だったことは、フェアトレード商品が一ヵ所でしか購入できず、しかも、レストランと会計が一緒のため混雑し、出発时刻が遅れてしまったことでした。しかし、フェアトレード商品に関心を寄せてくれた児童生徒の皆さんには感謝をしたい。

きつと発展途上国に役立つと確信する。黒岩さんが後礼の挨拶をし、よいよ研修の最後の場所、スリランカ大使公邸へ。

公邸の前は大型バスを入れないため、目白通りで降りて添乗員の吉田さんを先頭にゾロゾロ歩くこと五分。公邸ではガードマンさんがチェック。階段を上がるともうそ



地球ひろばを見学

も点在し、現在観光に力を入れている事。特にアヌラーダプラ、ボロンナルワ、キヤンディの三つの都を結ぶ地溝は、文化三角地帯と言われて考古学上貴重な遺跡群であると力説していた。海に囲まれた国は魚介類が豊富であること。丘陵地帯には、かの有名なセイロング茶畠が広がり、畜産業も盛んで、

これは素敵なフローリングと絨毯が応接間へと続いている。ダンミカ駐日スリランカ大使はじめ館員の方々は私たち訪問者を総出で歓迎してくださいり、座る場所を示してくださいました。ダニミカ大使の流暢な日本語での歓迎のことばがあり、外交官二人が用意したスライドを映しながら英語と日本語でスリランカの国の説明をしてくださいました。斎藤さんの到着挨拶が出来ず、説明が進められてしまい、ごめんなさい。国土は四国と九州を合わせた大きさの「真珠のなみだ」といわれたこの国は世界遺産が八ヶ所も点在し、現在観光に力を入れている事。特にアヌラーダプラ、ボロンナルワ、キヤンディの三つの都を結ぶ地溝は、文化三角地帯と



佐藤さんの話を聞く

食料の豊かさが分かつた。公邸という特別な会場では、大使館専属料理人三人がおやつのおもてなしをしてくださいました。カツレツ(魚のすり身を揚げた物)や豆を主に練り込んだワレ、チキン&魚ロールをその場で揚げ振る舞つてくださいました。ミルクの中にゼリーやアイスが入ったパルーラという飲み物もおいしくいただきました。一方では外交官が女の子にサリーの着付けをしてくださいり、列をなしていただけた。返礼として高橋そらさんが空手の「かた」を披露。応接間にはジユータンの処とフローリングの処があり決して披露するのに適した場所ではなかつたが、演技者の真剣なまなざしとかけ声に皆静まりかえって見入つた。また、高橋杏さんが毛筆で「一期一会」と書いた書を大使にプレゼントした。全員で記念写真を撮り、英語で高橋杏さんがお礼を言い、ダンミカ



世界料理のバイキング

岩鼻小学校6年 高橋 杏  
私は昨年に引き続き、本年の第

大使のお見送りで大使館を後にしました。大使からスリランカ紅茶や素敵なお土産が贈られました。まだ陽さしが眩しい夕刻、一路高崎へ。美女木を過ぎ三芳SAを過ぎると車の流れが怪しい。運転手さんと添乗員さんの打ち合せの声が不安を募らせる。案の定、通行止め表示が目の前に見える。何とか早く到着したいと高速を降り一般道へ。ルート選択が成功し七時十五分青年センター到着。宮島君の帰着の言葉に安堵。保護者の皆様、関係各位に感謝しつつ終了した。

## 世界の文化にふれることのできる貴重な体験

JICA地球ひろばでは、「食品」というテーマについて、食品ロスや飢餓と肥満などの展示を見学しました。世界の飢餓人口は約八億人と、想像していたよりも多くの方々が飢えに苦しんでいるのにも関わらず、日本や私の学校でも給食等で残るものがあつたりすることに切なさを感じました。食べられるところに感謝しつつ、食品ロスをなくすことができるようになりました。

四階の部屋では海外青年協力隊でバングラデシュに行ってきた佐藤さんのお話を聞きました。バングラデシュは、町中至る所にゴミが落ちていたそうです。そのため呼び掛けて、ポイ捨て禁止デモを行ったそうです。この行動により、美しい街並みが戻ってくるきっかけになるといなと思いました。



おやつのもてなし

佐野中学校1年 小代 美園  
私は、今年の夏にユネスコ国際理解バスに参加しました。午前中はJICA地球ひろばを、午後はスリランカ民主社会主義共和国大使館を見学しました。

## ユネスコ国際理解バスに参加して

JICA地球ひろばでは、「食品」というテーマについて、食品ロスや飢餓と肥満などの展示を見学しました。世界の飢餓人口は約八億人と、想像していたよりも多くの方々が飢えに苦しんでいるのにも関わらず、日本や私の学校でも給食等で残るものがあつたりすることに切なさを感じました。食べられるところに感謝しつつ、食品ロスをなくすことができるようになります。

私は昨年に引き続き、本年の第

四十回国際理解バスに参加させて頂きました。

行きのバスでは自己紹介をしたり、引率の先生方が出して下さった、今年の最高気温・高崎市の人口などのクイズをしたりしました。ためになる問題が多く、勉強になりました。楽しかったです。

次にスリランカ大使公邸を訪問させて頂きました。先ず初めにスリランカの外交官の方から、国の特色・文化・食べ物についてのプレゼンテーションがありました。仏教の話、民族衣装サリーの説明を伺い、そして、スリランカの家庭食と、甘い飲み物を頂きました。魚のカツレツはとてもおいしく、飲み物はとても甘くてタピオカジュースのような味わいででした。

また、私は書道で習っていたため、「一期一会」という書を大使にお渡しすることが出来ました。大使はとても喜んでくださり、私もとても嬉しかったです。さらに、今回はお礼の挨拶も担当させて頂きましたが、英語とスリラ

行つたそうです。この行動により、美しい街並みが戻ってくるきっかけになるといなと思いました。

そこでお昼ご飯には、海外のひとこまめのカレーや辛めの鶏のから揚げなどを食べました。普段は食べることのできないJICAのランチは、ピリ辛でとてもおいしかったです。

次にスリランカ大使公邸を訪問させて頂きました。先ず初めにスリランカの外交官の方から、国の特色・文化・食べ物についてのプレゼンテーションがありました。仏教の話、民族衣装サリーの説明を伺い、そして、スリランカの家庭食と、甘い飲み物を頂きました。魚のカツレツはとてもおいしく、飲み物はとても甘くてタピオカジュースのような味わいででした。

今後、またユネスコ理解バスに参加できる機会があれば、次に班長の職務を狙つてみたいと思います。また、英語をもっと話せるようになりたいです。

私は今回の経験を生かして、今の自分に何かができることがないか考えたいと思います。そして将来、青年海外協力隊の皆さんのように、自分の役に立つ仕事につきたいと思います。また、英語をもっと話せるようになりました。

私は今回、スリランカの文化に触れて、その文化をえることはとても難しくて時間がかかります。その上、昔から身分差別があり、現在も貧困に苦しんでいる人が大勢いる事を知りました。私達の国日本も、昔はゴミ大国だったそうです。川にゴミを捨てたり、道に投げていたそですが、だんだんと「このままではだめだ。」と気付いたそ

うです。JICAでは、ゴミ収集車百台をバングラデシュにプレゼントしました。バングラデシュも日本のように、このままでいけないということに一日でも早く気付

いてきて、少し怖かったです。学校が違い、普段出会う機会がない子ども達との交流はとても楽しかったです。

スリランカの公用語であるシンハラ語で伝えるため、とても緊張しました。帰りのバスでは、自分たちでクイズを出し合いました。初めはその音に驚きました。ゴミをその音に合わせて盛り上げていたので、運ぶ人は、周りの人に差別を受け、ゴミ山ができてしまうのは、道にゴミを捨てるのが当たり前のバングラデシュの文化に原因があり、その文化をえることはとても難しくて時間がかかります。その上、

昔から身分差別があり、現在も貧困に苦しんでいる人が大勢いる事を知りました。私達の国日本も、昔はゴミ大国だったそうです。川にゴミを捨てたり、道に投げていたそですが、だんだんと「このままでだめだ。」と気付いたそ

うです。JICAでは、ゴミ収集車百台をバングラデシュにプレゼントしました。バングラデシュも日本のように、このままでいけないということに一日でも早く気付

いてきて、少し怖かったです。学校が違い、普段出会う機会がない子ども達との交流はとても楽しかったです。

スリランカの公用語であるシンハラ語で伝えるため、とても緊張しました。帰りのバスでは、自分たちでクイズを出し合いました。初めはその音に驚きました。ゴミをその音に合わせて盛り上げていたので、運ぶ人は、周りの人に差別を受け、ゴミ山ができてしまうのは、道にゴミを捨てるのが当たり前のバングラデシュの文化に原因があり、その文化をえることはとても難しくて時間がかかります。その上、

昔から身分差別があり、現在も貧困に苦しんでいる人が大勢いる事を知りました。私達の国日本も、昔はゴミ大国だったそうです。川にゴミを捨てたり、道に投げていたそですが、だんだんと「このままでだめだ。」と気付いたそ

うです。JICAでは、ゴミ収集車百台をバングラデシュにプレゼントしました。バングラデシュも日本のように、このままでいけないということに一日でも早く気付



サリーの着付

私は、今年の夏にユネスコ国際理解バスに参加しました。午前中はJICA地球ひろばを、午後はスリランカ民主社会主義共和国大使館を見学しました。

JICA地球広場では、バングラデシュの現状と貧困を学びました。私は、バングラデシュについて知らないことが多い、現在のバングラデシュの状況を知り、同じ

いてほしいです。JICAの人達もそう願い、日々努力しているそうです。

私はJICAの売店で、フェアトレードの人形を買いました。私が買った人形は、フィリピンのゴミ山周辺に暮らすお母さん達が1つひとつ手作りしたものです。私が買ったことで、フィリピンのお母さん達の生活が少しでも豊かになつてほしいと思いました。

スリランカ大使公邸では、スリランカの民族衣装であるオサーリアを試着させてもらいました。インドのサリーと素材は似ていますが、オサーリアにはプリーツがついています。素材はとても薄く、スリランカのような熱い国にはぴたりだと思いました。大使公邸で、私は初めて、フェアトレードやバンガラデシュのゴミ山、スリ



空手の「かた」を披露



書道作品をプレゼント

ランカという国を知りました。今回の学習で、今の私の生活とはかけ離れた生活をしている人々の存在を知り、世界は本当に広いと改めて実感しました。そして、皆が協力することで世界が豊かになりますが、まだあまり思いつきませんが、まずは、今回学んだことをや感じたことを周りの友人や家族に伝えたいと思います。そして、日本のことだけではなく、他の国現状について勉強し、いつかJICAの活動に参加できるようになります。JICA地球ひろばでは、「食」をテーマとした展示で、世界には貧困により飢えや肥満に苦しむ人々がいることが分かりました。飢えと肥満、相反することで、お金がないのにどうして肥満なの

## 国際理解バスに

### 参加して

箕郷中学校2年 飯島 拓己

今回で4度目の参加となつた国際理解バス。今回はどんなことが学べるかと、とても楽しみでした。JICA地球ひろばでは、「食」をテーマとした展示で、世界には貧困により飢えや肥満に苦しむ人々がいることが分かりました。飢えと肥満、相反することで、お金がないのにどうして肥満なの

か大きな疑問でした。話を聞くと、開発途上国では学校に通えない子どもも多く、栄養に関する知識が低いこと、肉や魚、野菜などが高くて購入できないため栄養が偏っていることが原因だと分かりました。

また、地球案内人の方が、自分の体験について話してくれました。地球案内人の人が行つたバンガラデシュでは、ゴミなどそのまま廃棄されているそうです。だからゴミ山ができているそうです。日本ではありえないことに驚きとショックを感じました。

スリランカ大使公邸では、スリランカが独立するまでの歴史や、観光地、食べ物などを紹介していました。

には、他民族、多文化であることを表すように、イスラム教徒ヒンズー教を表す緑と橙色のラインや、仲良く暮らせるようにという意味を表す黄色などがあると分かりました。

昨年行つたケニア大使館でも、ケニアの国旗の色には、平和や統一、豊かな農耕地などの意味があつたなと思いましました。「国旗には平和の思想が込められているんだ」と改めて思いました。僕たちの生活とあまり関りがないスリランカですが、話を聞くことで、歴史や人々の生活などへの興味がわきました。

世界には僕たちと全く違う生活をしている人々がたくさん



スリランカ大使公邸で記念写真

んいることが改めて分かりました。豊かな日本に生きる僕たちにできることは、世界の色々な国のこと勉強したり、資源を大切にしたりすることだと思います。例えば、食品ロス1年分は、世界中にいる飢餓の人々が必要としている食料の量とつり合つてゐるそうです。「食べ残しをしない」「水や電気を大切に使う」などの身の回りのことでちよつと心がければできることがあります。僕たちが普段の生活を少し見直し無駄をなくすことが、開発途上国の人々への支援につながつていくと思います。この国際理解バスで感じたことをこれから的生活に生かしていきたいです。

スーパー・ボランティア尾畠春夫さんの出現はまだ記憶に新しい。あの鉢巻をまいた元気はつらつとした姿は、深く脳裏に焼き付いています。政治家や官僚の胡散臭い言動にホトホト嫌気がさしていの時期だけに、正にクリーンヒットであった。

今の日本に、これだけの理念と行動力を兼ね備えた人がいたなんて、驚きである。同時に、「自分にはとてもあそこまではできない」と思った人も多いのではないかだろうか。私もそうだ。

そこで、「ボランティア活動で大切なことはなんだろか」と考えてみた。それは、ボランティア活動に従事する時間の長さや、どれだけ人々に感謝されたかなどではなくて、たとえ些細な活動であっても、ボランティア活動に従事することによって得られた体験を通して、自分の日常生活を見つめ直す視点を獲得することはないか、と考えた。難しい理屈ではなく、例えばゴミを拾う活動をすれば自分自身を見つめる目も多くなつらぽい捨てをすることも少なくなるだろう、ということだ。多種多様な活動に参加することによつて、自分自身を見つめる目も多くなつていく。ただし、生真面目過ぎて、がんじがらめになるのは困ります。ほどほどにね。

## あとがき

皆さんはどう考えますか。(三浦)